令和７年９月１日　*vol.22*

# 「夏から秋へ、人から人へ」

県立神戸高等学校長
新谷　浩一

## ○　「青少年赤十字リーダーシップ・トレーニング・センター」から

1859 年、スイス人の青年アンリー・デュナンは戦争で怪我をした兵士の様子を目の当たりにし、「敵・味方の区別なく救護する団体を各国に置こう」「その団体は戦場で安全に活動できるようにしよう」との思いからひとつの組織を立ち上げます。それこそが赤十字です。今なお国際活動や救護活動、医療事業等で人々の生命や健康を守る活動を全世界的に続けています。

この流れを受け設立された青少年赤十字には本校を含め兵庫県内の 229 校が加盟しています。めざすべき態度目標は「気づき」「考え」「実行する」。そんな大人になれるよう行われるのがこの「トレーニング」です。本校からは養護教諭の川井先生と１年生の島村遥さん、安富心春さんが参加してくれていました。

**全県から集まってくれたのは中学生、高校生あわせて 69 名。主体的に生きる人に成長するための１泊２日。大人からの指示のないなか、参加者はまわりの人と協調しながら炊き出しや救急法の講習等に励んでくれています。本校２人の今後の成長ぶりにも期待してしまいます。人から人へ何ができるか、自分は誰かのために何ができるのか、そう考える時間ばかりですからね。来年は参加者がもう少し増えると嬉しい限りです。**

## ○　さらに「兵庫県吹奏楽コンクール」から

それにしても慌ただしい夏でした。「見に来てください」と誘っていただいた試合やコンクールなどはすべて同じ空間を味わいたかったのですが、気づけば夏休みの半分以上は出張が入り、何度も涙を呑むこととなりました。『やり残し感』ありです。そんな中、きちっと出張の合間を押さえてくれたのが吹奏楽部でした。

先ず７月末の神戸地区予選は夏の研修と時間が少し重なっていたのですが、途中退出を許してもらい鑑賞。県大会出場校を発表される瞬間にも立ち会うことができ、部員の歓喜の声を聴けたのも嬉しかったですね。８月の県大会当日も午前中は主催する会議があり、抜けることは許されなかったのですが財田先生は 14 時以降の出場権を獲得してくれたため、じっくり見せてもらうことができました。この日も心に響く演奏でした。

さて、この県大会は姫路市で行われたのですが、嬉しいことがいくつかありました。本校の保護者の方々と会場でお話しできたこともそうですが、会場に向かう際、人から何度も声をかけてもらいました。「先生、お久しぶりです。今日は神戸高校の応援ですか」と。去年、加古川東高校でともに過ごした子どもたち。わざわざ話しかけてくれたことも嬉しかったですが、私の転任先を覚えていてくれたことも嬉しいことでした。

ちょっと浮かれ気分になった私は、その中の１人の子に話しかけました。「髪の毛、かなり赤いやんか」と。すると少し照れた表情で「あっ、卒業できたんで…」と返してくれます。このやりとりも嬉しかったですね。

さて、夏休み最後の週、校庭からは掛け声やメロディが聴こえてきます。コンクールが終わったら、次は 10 月の体育祭で披露するマーチングの練習ですね。暑さはなかなか緩みませんが、夏から秋へと確実に季節は動いています。私にとっては『やり残し感』の多い夏。でも、ひとつだけ『やりきった』こともあります。

**１学期の終業式でお願いしましたよね。「せっかくだから今は疎遠となっている人にお出会いしてほしい」と。「会えなくなってから『会いたい』と願ってもそれは叶わないからね」と。だって夏休みは普段会えない方と出会える絶好の機会ですもん。どれだけ多くの人と世界を共有できているかというのは財産ですから。**

私は普段お出会いできない方とたくさん会いました。そんな方々のことを書いた過去の通信がありますので、今回はそれを付録にします。前向きな生徒の姿に触れ、好きな方々と多くの時間をともにした今は無双な気分です。「さぁ、来い。２学期」ってな感じです。

令和５年１０月２３日　*vol.36*

# 「だって、すべては自分次第でしょ」

高校教育課長
新谷　浩一

## ○　僕の出会った校長先生方は皆、師匠なのです

龍野高校で卒業された内海芳樹先生は教えてくれました。
**「親分は演技で構わないから、即座に判断する自分を演じないといかんよな。それで、失敗したら潔く頭を下げたらいい。自分だけ評価されようなんて、目先の功名にとらわれたら絶対にあかん」**と。

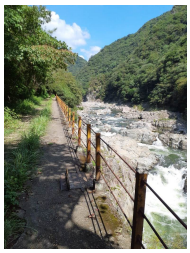
尼崎稲園高校で卒業された上野晃司先生は教えてくれました。
**「管理職は一流を演じる三流になったらあかん。三流を演じられる一流にならんと。それと、職場は皆が自分の居場所と思えるようにしないといけない。そのために常に笑顔を忘れないようにするんやで」**と。

そう言えば、姫路西高校で卒業された尾崎文雄先生も同じようなことを教えてくれましたっけ。
**「管理職は管理職を演じないと駄目ですよ。先ずは誰に対しても明るく元気に振る舞うこと。そして自分自身は積極的に仕事をすること。人に頼まれたら『喜んで！』という姿勢じゃないと駄目です」**と。

伊丹高校で卒業された秋田久子先生にはお酒をご一緒にしてもらいながら、教えていただきました。
**「私は『人を使う人』になる前に『人に使われやすい人』になろうって決めたんです。信頼し、お願いされる人になるのがいちばん大切だと思っているので。だから校内でも先生方と話す時は必ず手を止めて立ち上がり目を合わせるようにします。目も合わせてくれない上司を信頼するのは難しいですもん」**

**「もうひとつ。私はね、エネルギーは出せば出すほど湧いてくるものだと思っているんですよ。出し惜しみをしていたら、枯れるだけなんです。だから愛することを大切にしているんです。愛情をかける対象がなくなったらエネルギーも枯れます。常に愛する対象を持つことが何より大切だと思うんですよ」**

## ○　福知山線の廃線跡を歩きながら…



８月の暑い日、僕は『山登りの会』の仲間と福知山線の廃線跡を歩いていました。かつて JR の生瀬駅から武田尾駅までの間は武庫川の渓流沿いに鉄路がありましたが、今は高架化されて、古い鉄路は枕木がほぼ当時のまま残されています。トンネルの跡はぐっと気温が低く、ひんやりとしていることもあり、僕らにとっては夏の絶好のハイキングコースになります。

仲間の１人が言います。「僕も課長が教育委員会に入ったのと同じ 36 歳になったんです。でも、課長通信を読む度に考えるんですよね。この先、課長のような濃密な行政人生を送れるのかなって」と。今は市教委の指導主事。力を買われて市教委内でも重要なポストを任されている若手の有望株。でも、僕について言えば、ただ必死に走り続けてきただけ。濃密な日々になったのは『結果として…』って話です。だから言いました。「素敵な出会いがいくつもあり、その縁は大切にできたかなって思ってるよ」

現在、育児休業中の仲間の１人は言います。「離職再採用を考えているんですよ。さすがに幼い双子を抱えたまま学校で普通に教員をする自信はないので、とりあえずいったん辞めようかなって…」と。だから双子を育てながら今も前向きに働き、高校教育課で重責を果たしてくれている清水副課長の話をしました。「そういう人生も、兵庫県では可能だという素敵な例だよね…。まぁ、チャンスがあれば、会ってもらって話を聴いてみる？」と提案すると、「御願いしたいです」と大喜びです。

**『出口のないトンネルはない』と人は言います。出口がなければ、ただの洞窟です。目の前の暗闇をトンネルにするか洞窟にするか。もしも自身に突破力があれば、突破していけばいいのです。僕？　僕はそんな自信はないので、常に先輩方の言葉を心の支えにし、仲間の力を借りて向こう側の光に辿り着いてきたように思います。だって、すべては自分次第でしょ。**

令和６年１２月９日　*vol.35*

# 「繋がって生きている」

県立加古川東高等学校長
新谷　浩一

## ○　ちょっと嬉しいこと

　ある日、校長室に私宛てのレターパックが届きます。播磨特別支援学校の藤井生也校長先生から。封を開くと革製のコインケースとキーホルダーが入っていて、メッセージが添えられています。
**「いつも校長通信をありがとうございます。本校生徒の実習で製作しました革細工をお送り致します。また、宣伝していただければうれしいです。ご笑納ください」**とのことです。

　高校で 14 年勤務した間、クラス担任として肢体不自由の生徒や視覚障碍、聴覚障碍のある生徒を担任した経験もあり、それなりに特別支援教育はわかっているつもりでした。それが単なる思い上がりだと気づいたのは、学校を離れてからのことです。

『障碍のある児童生徒をもつ母親集会』に参加させてもらったときのことです。たくさんのご要望をお聞きしました。県教委の代表として「学校や先生方の理解の乏しさ」を厳しく訴えかけられました。時には「それは言い過ぎじゃないか」と思うくらいにトゲのある言葉もあり、時には「確かに仰るとおりですね」と思わせてくれる言葉もあります。ゆらゆらと心を揺らされながらも平静な表情を保ち、耳を傾けていましたが、途中である保護者の方から投げかけられた言葉に私は動揺を隠せなくなりました。

**「先生。私は神社やお寺にお参りしても願うことはただひとつ。『どうか、この子より１日でも、いや１時間でも長く生きられますように』それだけです。私がいなくなったら、誰がこの子を支えてくれるのか、そう想像すると苦しくてたまらなくなるんです。そんな気持ちで毎日を過ごしている親の身になって、皆さんが子どもに接してくれたら、私はどんなに幸せなことか。先生、どうかお願いしますね」**

『わかっていなかった』強く思いました。それからは特別支援学校にお願いして自立活動の時間に立ち会わせてもらったり、スクールバスに一緒に乗せていただいたりしました。もちろん、そんなことで保護者の方の気持ちがわかるわけはありません。でも、そんなふうに入り込まないと特別支援学校で働く先生方の気持ちはわかるはずがないし、そこがわからないで人事異動を担当する怖さもあったのです。

**播磨特別支援学校の生徒が作ってくれた革細工の商品名は『パサパ』。その名の由来が添えてあります。『仏語で「一歩一歩」という言葉です。生徒たちが力を合わせ、ゆっくりですが確実に一歩ずつ進んで成長していく…、という思いを込めて名前をつけました。皆様に支えられてこそ、前に進んでいけることを本当にありがたく思っています。感謝』　私の通信のお礼の品としてはもったいないですね。**

藤井校長先生から「先生が書いている通信、よかったらいただけませんか？」との依頼を受けたのは２ヶ月前のこと。私にしてみれば書きたいことを書いているだけのものなので、怯むところはありますが、４月１日に『祝　御就任』という立看板をつけて校長室に胡蝶蘭を贈ってくださった方です。その恩義もあり、それからは本校の『校長室から』のページにあげてもらったあとメール送信しています。

この現在のスタイルですが、押しつけがましくないところがかなり気に入っています。去年までの通信はすべての課員に一斉にメール送信していましたから。ちなみに今は、依頼をいただいた方には『校長室から』にあげてもらったあと、一斉送信をしています。アドレスの数を数えると、100 近くになります。この通信を読んでくださっている方が校外に 100 人近くおられるということですね。

幅広く東高のことを知っていただくこと、別々の場所で働いていても思いを繋いで生きられることは本当に有り難いことです。中にはもう亡くなられた方もいます。今回はその方のことを書いた通信を添えます。たかが通信ですが、これまで出会った方々との繋がりに感謝しながら私は綴っているのです。

令和５年１月２９日　*vol.51*

# 「あなたへ」

高校教育課長
新谷　浩一

○　その方からのメール

『いつも大変お世話になり、ありがとうございます。このたびは通信をお届けいただき、誠にありがとうございます。校長先生から「いただいてはどうか」とお話をいただき、厚かましくもお願いしました。東灘高校に転勤となり、私自身が取り組んでみたいことや先生方にお伝えしたいことが色々出てまいりました。忙しさを理由にはしたくないのですが、日々の業務の中でそのままになってしまうこともあります。新谷課長は大変お忙しいとは存じますが、通信をお書きになられているとお聞きし、ぜひ勉強させていただきたいと思いました。お手間をおかけしますが、どうぞよろしくお願いいたします』

『おはようございます。昨日は通信をお届けいただきありがとうございました。すぐにお返事を、と思っていましたがタイミングを逃してしまい、本日お礼申し上げる次第です。現場しか経験のない私にとって、高校教育課がどのような場所なのか全くわかりませんでした。でも、課長の通信を読ませていただき、現場のことを考えてお仕事なさっているお気持ちや様子に触れることができました。
　また、誰もが「変えた方がいい」と思っていながら「変えられなかった」ものを変え、感謝される、というお言葉がとても嬉しく、勝手ながら大変勇気づけられました。長くなってしまい、お忙しいところ申し訳ありませんでした。今後ともどうぞよろしくお願いします』

『おはようございます。昨日はお便りをお届けいただき、ありがとうございました。毎週お便りが届くことが楽しみです。課長がお忙しいなかでも、お仕事に励む様子が伝わってきて元気になります。職員室でこっそり拝読しており、お礼が遅くなり申し訳ありません。
　19 号では新谷課長が、現在、校長先生としてお力を発揮していらっしゃるそうそうたる方々と一緒にお仕事をなさっていることを知ることができました。18 号では課長の自己開示の広さに触れることができました。（13 号でも課長の自己開示にふれている校長先生がいらっしゃいました）
　私は自分のことを書くことに恐れがあります。ですが、課長の文章からはお人柄や読む人たちに対する信頼の気持ちが伝わってきて、大変心を打たれました。いろいろな思いを整理なさったうえでの表現かと思います。ありがとうございました。長くなり申し訳ありませんでした』

『おはようございます。昨日の教頭研究協議会、ありがとうございました。課長のお話は通信の３号でも読ませていただいていましたが、直接お聞きできて、その時の緊迫した状況や課長のお気持ちが、よりリアルに伝わってきました。中でも「謝らない」ということ。「自分が謝ると現場の先生方の３年間の苦労が反故になる」というお言葉が胸にしみました。危機管理における決断について学ぶことができました。高校教育課では、お１人が教頭先生に出られたので１名減ということでお仕事をなさることになりましたが、あたたかいエールの 20 号の通信を読ませていただき、人が足りないとか、忙しいとか、愚痴をこぼしている場合じゃないと、反省しました。今週も頑張ります。ありがとうございました』

　その方に通信を送るようになったのは今年度に入ってからです。「いい校長先生になるだろう」そう期待した元上司の校長先生から「課長の通信を彼女にも読ませてあげてほしい」と依頼されての始まりでした。以来、その方からはよく感想のメールをいただきました。でも、昨夏を境としてメールは途絶えました。そして令和４年１２月２日、闘病の末その方はお亡くなりになられました。志半ばにして。

「何も知らない振りをして通信を送り続けるのは、失礼なことなのかもしれないな…」そう思った僕は辰田副課長に相談しました。「送るのをやめた方がいいかな」と。でも、辰田副課長は少しも逡巡せず、まっすぐに答えをくれました。「送り続けていいと私は思います」と。
　野原由里子教頭先生、はやいものですね。先生が亡くなられ、49 日も終わりました。でも、僕の通信、今も読んでくれていますよね。あなたはここにともに生きています。